波間に沈む者達

黄葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
波間に沈む者達

【Ｎコード】
Ｎ６５９７Ｘ

【作者名】
黄葉

【あらすじ】
男は妻を亡くし、故郷を捨て、あらゆる罪から背を向けて、遥か遠く、海を見るために旅に出た。
少年は、雪に埋もれ荒れ果てた家で、孤独と幻影に苛まれながら生きていた。
ある冬の日、雪の町で、彼らは出会った。

居場所を失った二人の物語。

序章

冬になれば雪に埋もれる北の町、雪と煙で灰色に煙る小さな町のはずれに、少年はたった一人で住んでいた。

父は居ない。母も居ない。友人も居なければ親類もない。彼が持っているのは、必要以上に大きな家と、生まれた時に貰った名前だけである。

家は荒れ放題で、一階の窓硝子は割れたら割れたまま、少年は直そうともしない。その代わり、二階は綺麗に整えてそこで寝起きしている。

町の人々はそんな彼を敬遠していた。彼等からしてみれば、年端のいかない子供が荒れた家に一人で住んで居るというのは、奇異にしか映らないのだろう。だが、理由はそれだけではないのだと彼は知っている。少年のほうには、それ以外に思い当たる節が少なくとも二つは在るのだ。

理由の一つは噂話の類で、しかもそれは彼自身がどうこうしたと言うものではない。ただ噂の人物が、少年に極めて近い人間だったから、結果的に彼が煽りを喰っただけなのだ。理由は明らかではあるが、謂れのない迫害である。

だが、もう一つの理由は、間違いなく彼自身の問題である。彼は時々――本当に時々である――妙な言動をとるから、それが人々には不気味なのに違いない。

それが何によるものなのか、答えは明瞭過ぎるほど明瞭に、いつも彼の前に在った。しかし彼は人に対して弁明をしたことはない。する必要はないし、したって誰も信じないことは解っていた。だからこそ彼は独りだったのだし、人と関わることを自分から放棄していたのだ。

諦めていた。淋しくなかったわけでは、決してない。避けられて拒まれて、自分が傷付いていることを彼は知っていた。知っていた

から、わざと心を麻痺させて日々を送っているのだ。
日々を殊更無感動に――生活に追われて、生きるために生きているのだと、周囲と自分に思い込ませるために。
歪んだ形で蓄積していったものの均衡は、ある冬の日の夕暮れを境に崩れはじめた。否――それはきっかけに過ぎなかったかもしれない。その時の彼にとってそれは大した意味を持たない、ただの塵芥であっただろう。けれどもそれは、後になって――正確に言えば二日後から――意味を持ちはじめ、結果的に彼の世界、彼の人生を、大きく変えることになる。
その日、空は暗く、雪を降らせていた。少年は帰宅の途中だった。底冷えのする白い世界、舞い落ち、降り積む雪の合間。それは水に濡れて黒い。
少年は新聞を拾った。

◆

――海が見たい、と思ったそうである。
それはその時、男の眼前にあった光景とは何の関係もなく浮かんできた思考であり、その場にはそぐわないものであった。
どうして唐突にそんなことを思ったのか、彼には解らなかった。
その時、彼の足元には罪の証が落ちていた。それは外ならぬ彼自身の罪である。その歪な証は、彼を責め、糾弾するものとしてそこに在った。それなのに、彼は海が見たい、などといかにも場違いなことを考えていたのである。
男は奇妙に思ったそうだ。本来彼は、自身のしでかした事を仕方がないと開き直ったり、正当化したりといった、小賢しい身の処し方が出来る質ではなかったからだ。彼は至って真面目な男だったし、もし自分が罪を犯したら、自分を赦すことは決してないだろうと、常日頃から考えていたのだと言う。卑怯な生き方はしない、と言うのが彼の信条だったのである。

だからそれは実際のところ、逃避以外の何物でもなかったのだが、男には解らなかった。ただ、唐突に浮かんできたその思考が、そうと認識した途端に強烈な欲求として衝き上がってきたのだと言う。

海に行きたい、なんとしてでも行かねばならぬ。そう――思ったのだそうだ。そしてその瞬間、彼の中でそれは「欲求」から「必要」に姿を変えたのだ。

彼は決めた。

必要なものをかき集めて小さな荷物を作った。その荷物を両手に抱えて、彼は故郷を離れた。故郷を離れてもっと西――海へ。

そうと自覚しないままに、彼の逃避行は始まった。

一話　雪の町

海はなかった。

クレイグはざくざくと足元の雪を踏んで歩きながら、やはりあの駅員に担がれたのだろうかと考えた。来た時と同様に、雪深い田舎駅の駅員を捕まえて聞いてみたら、町には山と工場が在るだけで海はないと言う。教えてくれた駅員の声は笑い含みであった。少し恥ずかしい気もした。

とはいえ、三十を過ぎるまでに、数えるほどしか故郷を離れたことがない自分のほうがおかしいのだと言うことは、流石の彼も了解している。今から思えば駅員を捕まえて海までの行き方を聞くなど、とんだ世間知らずである。事によるとからかっているように聞こえたかもしれないし、あの駅員を恨むのも筋違いだろう。

――それにしても。

クレイグは足を止めて、其処此処で雪を被った家々を眺めた。――来た途端に目的がなくなってしまった。

振り返れば、輪郭が朧になった駅舎を越えて遥か遠く、薄く薄く山が連なって見える。山々は駅舎のそれよりも更に曖昧に空に溶け込み、境界線は見えない。おかげで形は解らないが、そこには確かに山が在るのだ、とクレイグは思う。

そして彼は同時に、霞んだ山と同じように輪郭を失って胸の中を漂っているものを、ちらりと意識した。曖昧な姿も眼を凝らせば見えるはずであるが、クレイグは今それを見たくなかった。彼は山から眼を反らした。眼前の雪景色と、彼の胸中にある光景は連動している。――視界から朧な山が失せると、浮上しかけていた胸中の「それ」も姿を消した。代わりに床に墜ちて張り付いた、黒い毛織の女物の帽子が、ありありと眼の中に甦った。

――エルヴィーラ。

帽子に付いた花飾りの、艶めく紅色。光沢のない帽子の黒で、一

層強く際立って。
――そう、彼女の髪は金色だったから。
紅い花がよく映えた。色が白かったから、黒い帽子がよく似合った。あれを買ってきたのはもう十年近く前だったか。碧の眼があの花飾りの色を映すと、まるで炎が燃えるようで――。
風が吹いた。道脇に生えた樹の枝が揺れて、樹上に積もった雪がほとりと堕ちる。緩く躍るように空から舞い落ちていた雪が、風に煽られて流れを変える。もろに顔へとぶつかって、それでクレイグは物思いから覚めた。
「……ああ」
ぼつりと零すように、声が出た。襟巻きの間から洩れた息が白い。
寒い。
彼は一つ身震いした。頭を振るって、そこに僅かに積もっていた雪と一緒に、黒い帽子の幻影も振り落とす。それからわざとらしい口調で、泊まるところを探さんとなぁ――とつぶやいて、クレイグは再び歩き始めた。

◆

扉はぎぃぎぃと錆び付いた音を起てる。重い扉を開いたその中は、広いながらも寒々しい、荒れ放題の玄関だった。どう見ても廃屋である。
一歩踏み込んで見ると、庭に面した窓硝子がすべて割れているのが判った。当然ながら生活の臭いはない。硬い床は雪に濡れて、調度品に厚く積もった埃も黒く湿っている。大きく立派な建物なだけに、荒廃したこの光景には要らぬ想像を掻き立てられて、それが一層、眼にも心にも寒々しく映った。
玄関は広いばかり、風と一緒に雪までが吹き込んで、ひどく寒い。クレイグは薄暗い廊下を進んだ。背後で扉が軋みながら閉まった。
なんとなく恐る恐る歩いて、幾つかあるドアを開けて使えそうな

部屋を探した。だいたいの部屋は窓が割られているか、一晩でも寝る気にはなれないほどに散らかっていたが、廊下の奥の部屋は窓が割れていなかった。しかも比較的、綺麗である。

贅沢を言っている場合ではない。こんな雪の日に野宿をしたら凍死である。今夜は此処で寝ようと決めて、クレイグは部屋に滑り込んでドアを閉めた。外の風の音が、少しだけ遠く、小さくなった。

ドアを閉めてしまうと、部屋の中は暗かった。手に持ったカンテラの明かりはか細い。眼が馴れるまで、クレイグはドアの前に佇んだままじっとしていた。

やがて暗闇に馴れた眼に映ったのは、台所――のようだった。やや縦長の部屋の壁に沿って並んだ、空の棚と調理台。入って来たのと反対側の壁に、棚の影に隠れるようにして設置されているのは勝手口だ。木枠に硝子を嵌め込んであるが、硝子はどす黒く汚れていて、窓としての役割は果たしていない。

クレイグは部屋の隅に寝場所を定めて、荷物の中に丸めて入れておいた毛布を取り出した。寒いが、コートも被ってしまえば眠れないこともないだろう。それでも冷たい床にいきなり横になる気にはなれなかったから、カンテラの灯で床を温めようと馬鹿なことをやっていて、ふと彼は動きを止めた。

微かな――音がする。

――外だ。

反射的に勝手口を見た。

黒く汚れた窓硝子。家の裏手には何が在るのだろう。外は見えない。

また、微かな音が聞こえた。軽い、小さな――雪を踏む足音のような。風の音に紛れて、判らないほどに小さく。

また聞こえた。先程よりも大きい。

――近づいている。

クレイグは知らず知らずのうちに腰を浮かせていた。壁に張り付いて、右手に持ったカンテラを掲げて。

その音は既に、一定のリズムを持って聞こえるようになっていた。すぐ外に居るのだ。吹雪の中を雪を踏んで、当たり前の歩調で近づいてくる誰か。

クレイグは悪寒を覚えた。

はっきりと聞き取れるようになっても、その足音はひどく軽い。大人の男が――例えばクレイグが、どんなに足を忍ばせて雪原を歩いても、こんなふうには歩けない。こんなに軽い足音で歩くのは子供か女性だけだ。

そう――女性だ。

脳裏に黒い帽子が甦った。金の髪。紅い花。他に誰が来るだろう、彼の居るこの場所に。

――エルヴィーラ。

碧の眼。白い肌。どんなに顔を歪めていても、彼女は輝くばかりに美しかった――。

足音が止まった。人の気配。カンテラを持った右手が震える。

（――嗚呼、エラ――エルヴィーラ）

外に居る誰かはノブに手をかけ、

（――エラ、お前は私のことを）

ノブはかちゃりと高い音を起てて下がる。ゆっくりと硝子の嵌まった扉が開いて、雪が舞い込む。

何かに喉を塞がれたように、声が出ない。

（帽子。花飾り。金髪と碧の眼の――）

扉が開き切る。冷たい風が部屋に流れ込んだ。外はほんのりと明るい。四角く切り取られた背景を背にして立っている、あれは――。

――あれは誰だ。

知らないままで居るのは怖かった。クレイグは無意識に、更に高く右手を持ち上げる。どう、と一際強く風が吹き込んだ。

ゆらりと橙色の光が揺れて。

灯が消えた。

一話　雪の町（後書き）

序章だけアップしておくのも変な気がしたんで、第一話もあげてみます。

初の長編小説です。
頑張ります。

二話　レネ　1

誰――と、人影は言った。
その声は、開け放ったままの扉から吹き込む風に流されて、ひどくはっきりとクレイグの耳に入ってきた。若い、幼い響きさえ持った――男の声。
――ならばそれは、あの女（ひと）ではありえない。
クレイグは我知らず、安堵と落胆の入り混じったため息をついた。
小柄な人影は首をかしげるようなそぶりをしてから、パタンと軽い音を経てて扉を閉めた。室内はまた暗くなって、人影が持っていたカンテラは明るく際立ち、その人の姿をくっきりと照らしだした。
少年だった。年の頃なら十五、六歳くらいか。あどけない、無邪気な風情の。
少年は壁際に歩み寄って、慣れた手つきで壁ランプに火を移した。部屋がぼうっと明るくなる。
そこでクレイグは、ようやくこの状況の奇妙さに思い至った。お互いに黙りこくっているのも妙だし、この少年のあまりに手慣れた様子も――まるでここに住んでいるようではないか――どう考えてもおかしい。こんな荒れた家に住む子供がいるだろうか。彼がもしも此処に住んでいるのだと仮定すれば、少年からしてみればクレイグは侵入者である。どう考えても招かれざる客だ。
そもそも、少年の問いにもクレイグはまだ答えていないのである。誰、と聞かれて黙りこくっている奴も怪しいが、返事がないからといって追及しない少年も少年だ。少し――気味が悪い気がした。クレイグは怪談の類は好きではない。
とはいえ、このまま永遠に黙ったままというわけにもいかない。クレイグは腹を括（くく）った。
「失礼――ここは、君の――？」
壁ランプの火の具合を矯めつ眇めつしていた少年は、ふいとクレ

イグのほうを振り返った。ランプの橙を照り返す瞳の水色が、クレイグの眼には妙に鋭く映った。
少年はこくりと頷く。
「そう」
「ここに――住んでいるのかい」
「そうだよ。ここは僕の家だ」
少年は短く言ってから、そっけない口調で、おじさん誰さ――と尋ねた。
「旅の人？　だったらちゃんとした宿だって、あるのに」
「ああ――すまない。この町には間違えて来てしまったようでね、うろうろしていたら日が暮れてきたから」
人が住んでいるとは思わなかった。クレイグがそう思ったことを言外に感じ取ったのだろう、少年は少しだけ顔をほころばせた。
「うん、廃屋にしか見えないのは僕も知ってるから、べつに良いよ。でもおじさん、間違えたって、何をどう間違えるとこんなところに来るのさ」
「いや、情けない話なんだが――海に行こうとしてて」
「海？　今冬だけど」
「うん。だがまあ、冬の海も良いだろう？　それでこうして荷物まとめて来てみたのだが、私は行き方がわからなくてね。だから駅員をつかまえて聞いてみた」
そうしたら此処までの切符を買わされたのさ――とおどけて言ってみると、情けないどころかなんとも間の抜けた話である。
案の定、少年は呆れた顔をしている。
「おじさん、海ってまだまだ先だよ。この町で乗り換えて、違う列車に乗らなきゃ」
当り前だろう、といった顔でそんなことを言う。
「え」
「え、じゃないよ。あなたもしかして、箱入り坊ちゃん？」
「え――？　ああ、いや」

返す言葉もない。クレイグは何やらもごもごと口の中で言い訳をした。「箱入り坊ちゃん」とまでは行かないだろうが、世間知らずなのは確かだ。生まれた場所でそのまま大きくなって、長じてからも遠出をしたことはほとんどないと言って良い。仕事柄、自転車で走り回れる範囲が彼のテリトリーだったのである。そう説明すると少年は、おじさん何する人、と聞いた。

「郵便配達夫？」

自転車に乗る仕事、というので少年は郵便配達を連想したらしい。

「違うな。牛飼いの親爺（おやじ）だ」

「牛乳とか作ってたの？」

いかにも幼い口調で、少年は言う。

そう、とだけクレイグは答えた。

生家は牧場と工場を有する、ごく普通の規模の酪農家である。牛乳だのチーズだのを作って、固定客に届けるのに自転車を使うのだ。

親類縁者は居るが使用人を雇うような裕福な家ではなかったし、クレイグは一人息子であったから、幼いうちから手伝いをさせられた。子供のころはこき使われていたから遠出などする暇はなかったし、跡を継いでからも同様で、いまだにクレイグは牛の小間使いであった。牛飼いが牛を放って出かけてしまっては生活が立ち行かないのだから、これは仕方がない。

少年は首を傾げて、自転車、と呟いた。牛乳配達も自分でやるのさ、人手がないからね――とクレイグは投遣りに答えた。少年は、そうなの、と小さな声で言った。それから戸口にちらりと目をやった。

「おじさん、雪すごいけど、どうする？」

問われて、クレイグは自分が追い出されかかっていることを思い出した。

宿がある――と少年は言っていたか。正直なところ、あまり宿には泊まりたくない。懐具合が寂しいというのもあるが、人に顔を見られるのが嫌だったのである。それを言うならこの少年に会ってし

まった時点でもう駄目なのだが、宿の人間というのは世情に敏感であろうし――そしてまた、クレイグは目の奥に黒い毛織りの帽子が浮かび上がってくるのを感じた。
「宿、っていうのは遠いのかい」
黙っているのはおかしい。問われて返答に詰まったら問いで返せば良いのだということは、これまでの人生で彼が学んだ「逃げ」の戦法である。解決にはならないが、時間稼ぎにはなる。
「ちょっと遠いかな。あなた、雪道は駄目そうだね。きっと埋まっちゃうよ」
少年はそう言って楽しそうに、ふふ、と笑った。
「埋まるかね」
愚直に問い返すと、少年はうん、と頷いた。
「方向音痴みたいだし――」
「わかるかい」
「方向音痴じゃなかったらこんなところまで来ないでしょう」
そう言ってまた笑う。初めに感じた眼の色の鋭さは既になく、水色の眼は和らいだ光を湛(たた)えているように、クレイグには思えた。
「なんなら送って行ってもいいけど、ちょっと面倒臭いかな。泊まって行けば？」
「――良いのかい」
「どうぞ。部屋ならいっぱい在るし――二階は綺麗にしてあるから。僕、二階しか使ってないんだ」
そう言うと彼は壁ランプの火を消して、足元に置いていたカンテラを拾い上げた。クレイグの横をすり抜けて部屋のドアを開け、こっち、と促す。

二話　レネ　1（後書き）

長いので分けます。
若干の時間差で

レネ　2

再び厚く積もった埃を踏んで廊下を抜け、少年の先導で階段を昇る。階段に埃はなかった。

「そういえば、名前聞いてなかった」

軋んだ音を起てる階段をゆっくりと昇りながら、少年は言った。クレイグに視線を寄越したので、少し躊躇した末に彼は名乗ることにした。

「クレイグだ。クレイグ・オルフ」

クレイグね、と少年は繰り返した。君は、と問うと、少年は何故か少し嬉しそうな顔をした。

「レネ。本当はレナートなんだけど、レネで良いよ。皆そう呼ぶから――ああほら、二階は綺麗でしょう？」

カンテラのぼんやりとした明かりが廊下を照らす。確かに綺麗だった。二階だけを見る分には、階下の荒れ様など想像も出来ない。

レネはクレイグを一番手前の部屋に招き容れた。暗くてよく見えないが、テーブルがあるようだ。

小さく爆ぜるような音を起てて明かりが燈る。見上げると、一際大きなランプが天井から下がっている。しかも一つではなく、部屋の四方に一つずつ在る。

レネは最後の一つに火を入れてから、クレイグを振り返った。そしてクレイグの顔をしげしげと見遣って、

「――やっと顔が見えた」

と言う。

「――？　君の顔はちゃんと見えていたが」

そう言うと、少年はふるふると頸を振り、僕眼が悪くて、と言った。

「明るいところなら良いんだけど、暗いとあんまり見えないんだ」

「――そうか」

「うん。あれ、でも――」
レネは少し怪訝な顔をして、首を傾げてクレイグを見た。
「前に会ったことあるかな？」
「――え」
クレイグは瞬いた。何故か、激しく動揺していた。
「な、ないと――思うが」
「そう？　なんか見覚え在るんだけどなぁ、おじさんの顔」
そんな――はずはない。彼はこの町に、今日初めて来たのだから。
大袈裟な口調で否定して、彼はひどく狼狽している自分に気がついた。眼の奥に張り付いた黒い帽子が、別のものへと姿を変えようとしている。
――厭だ。
（やめろ。出て――来るな――）
「――うーん、まあ良いや」
レネはしばらくの間、首を傾げてクレイグを見つめていたが、やがて諦めたようにそう言って、クレイグに椅子を勧めた。おかげで、顕現しようとしていた幻影は、はっきりとした形をとる前に曖昧にぼやけて消えていった。
いろいろな意味を含めた礼を述べ、椅子の一つに腰掛ける。大きな樫のテーブルを囲んだ椅子は四つ。重厚なテーブルに相応しく、椅子もしっかりとした造りのものであったが、部屋が少し狭いので少々不釣り合いである。部屋の大きさから考えるに、元々は個人の書斎か寝室だったのだろう。
部屋の隅には本棚と、何故か白茶けた石炭焜炉（せきたんこんろ）が置かれていて、それで一層壁が迫って見える。
クレイグが部屋の様子を観察しているのに気がついたらしく、レネはその視線を追うように一度ぐるりと部屋を見回した。そして、ここは父さんの書斎だったんだ――と言う。寂しげな声だった。
「君は――一人なのかい？　その、家族は」
居ない――そう、切って捨てるように少年は答えた。クレイグの

向かい側に腰を下ろして頬杖をつき、隣の椅子の空白を見る。
「――誰も居ないんだ」
椅子は四つ在るのに――。ぽつんとつぶやいたレネの言葉に、クレイグはぼんやりとそんなことを考えた。
少年は空(から)の椅子に眼を向けて、そのまましばらく黙り込み、――クレイグがそろそろ沈黙に堪えられなくなってきた辺りで――やっぱり寒いね、と言って立ち上がった。
「お茶、入れるから。少し待ってて」
気怠い動きで焜炉の準備をし――クレイグの故郷では石炭が主流だったが、レネは薪(まき)を使うようだ――床に無造作に置いてあった新聞の、上の一枚を破り取る。くしゃくしゃと音を起ててそれを丸めて、マッチを近づけるが火が着かない。もう、とつぶやいたレネはその紙を焜炉に押し込んで、素早く次の紙を破ったが、やはり着かない。新聞が湿っているのかも知れない。
更に二枚ほど破り取ったところで、クレイグは見かねて椅子から立ち上がりかけた。何か別に燃やせそうな物を探そうと思ったのだが、そうクレイグが声をかけようとした矢先――新たにもう一枚新聞を破ろうとしていたレネが、短く、あ――と声をあげた。
手に持っていた擦ったばかりのマッチを焜炉の中に放り込む。火は一瞬朱く輝き、消えた。
レネの手が、破ろうとしていた新聞を掴んで取り上げた。それをまじまじと見てから、少年は困惑したような表情でクレイグを振り返る。眼が合った。
「おじさん――クレイグ――」
レネは呼び掛ける。声には当惑が滲んでいた。それに何故か、クレイグは――少なからず、ぎょっとした。
「なんだ?」
レネは――小声で問うた。
「クレイグ――姓は」
「オルフ」

先程名乗った筈である。
――なんだ。
そんなことを――何故聞くのだ？
「クレイグ・オルフ？」
「――ああ」
「そう――なら、クレイグ」
レネは困ったような顔で、しかししっかりとクレイグを見据えて――それからもう一度、その紙面に眼を落とした。そして今度はよく通る声で、なんで此処に居るのクレイグ――と、そう尋ねた。
その言葉はクレイグの耳の突き抜けて、深々と胸の奥をえぐり――彼は殴り付けられたような衝撃を覚えた。
「――何を」
短く問い返し、少年がこちらに紙面を向けるまでの短い間に、クレイグの脳裏で無数の映像が散らついた。紅い色、黒い色、朱いもの。
（何、じゃない）
答えは初めから知っている。少年が何を言おうとしているのか判っている。その記事に、何が書いてあるのかも。クレイグはすべて承知していて、――だから此処に居るのだ。
そして、其処に思考が及んだ刹那、ようやく彼は悟ったのだった。
（ああ――ああそうか）
彼は――。
「わ、私は――」
思考は彼の思いとは関係なく、勝手に口から滑り出していく。レネの薄い色の眼が、真っ直ぐに彼を見据えていた。
そして彼は。
逃げてきたのだ。
――そう、絞り出すように言葉の続きを吐き出して――。それでようやく、彼はこの旅が逃避行であったことを自覚し、――また、彼の罪は疾うに彼に追いついていたのだと言うことを、悟ったので

ある。

一間奏一　エルヴィーラ

――わたしは貴方の枷なのでしょう。檻なのでしょう。

夜の冷気に熱を失い、暗く冷たく沈んだ家の一室。妻は黒く濃い闇に包まれた身体ごと彼のほうを向いて。

涙声でそう言った。

彼の手にしたカンテラの、橙色の薄明かり。床に落ちた、まるで影のように黒々としたものを照らして、それが何なのかいくら自分に問いかけても――やはり彼には、その状況が理解出来なかった。

黙って立ちすくんでいるだけの夫に、妻は猶も語りかける。

――その人ならわたしが殺しました。

――わたしが檻なのです。ならば逃がしてさしあげる。檻のほうから壊れましょう。

彼は意味を汲めず、ただ眼を見開いて、闇に溶け込んだ妻の表情を読み取ろうと試みた。ああ、何故カンテラというのはこうもか細く辺りを照らすのか――。

妻はさらに続けた。

――人殺しの妻など貴方には必要ありますまい。

――その人殺しの、伴侶であった過去とて貴方には不要でございましょう。

妻はそう言って――笑い声を起てた。ぞっとした。そう――妻の言う通り、彼の足もとに落ちているものは、紛れもない人間の死体であった。

彼はようやく声を取り戻し、そして妻の名を呼んだ。――エラ、お前は一体何を言っているのだ。

――わかりませんか、ええわからないでしょうとも。貴方はそういう人ですものね。

妻は嗤った。

――わかりませぬわかりませぬ、貴方には絶対にわかりませぬ。

一際高く、泣き笑いのような、狂ったような笑い声をあげて――ふらりと妻は立ち上がった。か細い光が照らせる範囲に――ようやく妻の顔が現れた。

顔を歪めて泣いている。

エルヴィーラ、と彼は呼び掛けた。彼はいまだ妻の意図を汲めずにいたし、眼前に現れた妻の泣き顔に眼を奪われていたから――ほんの一瞬、彼は死体のことを忘れた。

しかし、彼がその歪んだ泣き顔に見入る間もなく、妻は床に屈み込んだ。そこに倒れ伏した誰とも知れぬ男の身体を仰向かせ、言った。

――この人は貴方に似ていたの。

こんなに細い明かりの中ではよく見えぬ。だから妻の言うのが、顔のことなのか内面のことなのか、彼には判断がつかない。

妻は涙の溜まった眼を橙色に光らせて彼を見上げ、打って変わって静かな声音で言葉を紡いだ。

――わたし達は――貴方もわたしも、一緒に居ても駄目なのよ。お互いの感情なんて関係ないの。こうして一緒に居たって――幸福(しあわせ)になんてなれませんわ。……でも、わたしは貴方が好きです。貴方も同じでしょう。

そんなことは――当たり前だ。そう彼は思った。

好きでもない女と、どうして一緒になどなるものか。彼がそう言うと、妻は深く眼を伏せ、――けれどそれでも幸福にはなれませんわね、と言った。彼は再び言葉に詰まった。

――貴方は真面目ですもの。働いて、お金を貯めて、わたしに苦労をかけないようにって、そうすることが愛だと思っているのでしょう。貴方があんなに一生懸命働くのは、わたしが居るからだわ。わたしが居なければもっと自由に生きるんでしょう。

カツ、と微かな音を起てて、妻は床に落ちていた何かを握りしめた。カンテラの薄明かりを鈍く反射して、それでナイフだと判った。ざわりと胸の底が鳴って、それをごまかすために声をかけようとし

たが、妻は口を挟む隙を与えない。
――わたし――わたしは、貴方が好きだったけれど、でも――ちっとも幸福じゃなかった。だって貴方はわたしを愛してくださったけれど、慈しんではくださらなかった！
妻は叫び、ナイフを振り上げ、――倒れた男の顔面に突き下ろした。すぐさま引き抜いて、また振り下ろし――三度、四度。
彼は狼狽し、焦り、恐れて――止さないか、何をするんだ――と叫んだ。
妻は手を止めて彼を見上げて――紅唇を歪めて、薄く笑った。
――わたしが幸福になれなかったのは貴方のせいですわね。ならば貴方が幸福でないのはわたしのせいです。
何を言うのか、この女は――。
――私は自分を不幸だなどと思ったことはない。
そう彼が言えば、妻は、
――不幸だとは言っていません。幸福でないのだと言いました。愛した者同士、一緒に居るは幸福、心が通わぬは不幸せ。ならば、わたし達はどうなのでしょうね。
そう言った。
妻は死体を撫でる。その手の動きは優しげで、彼はますます妻のことが判らなくなる。
――貴方とは心が通わなかった。
――だから他の人を愛そうと思ったのに、貴方はそれさえ許してしまった。わたしがやっていたこと、知っていらした癖に――怒るでもない。悋気も見せない。わたしは――。
虚しかった――。
妻の言葉は暗い部屋に吸い込まれて消えて、その僅かばかりの残響は重く鋭く、彼の胸を刺した。
――歪んでいますわ、なにもかも。わたしも――貴方も。
――貴方はきっと、謝るのでしょう？自分が悪いのだと、今、そう考えておいででしょう？

そのとおりだったので、彼は頷いた。
――それは間違っています。貴方はわたしに搦め捕られているだけですもの。わたしはきっと、生きている限り――貴方をわたしの隣に縛り付けずには居られない。ずっと貴方を閉じ込めるのだわ。ねぇ貴方、貴方だって心の奥ではわたしのことを邪魔にしているのでしょう。
違う。違う――そんな筈は。
彼はそう言いたかったのに、言葉は出てこなかった。
――だったらもう、こんなものは壊してしまいましょう。わたしはこれ以上、貴方の枷で在りたくない。
彼女は、哀れな死体からナイフを引き抜いて。
それから彼を見上げて、微笑(わら)った。
――何をしようと言うのだ。そんなものを持つんじゃない。
ようやく発した彼の言葉の、なんと愚かに響いたことか。既に事は起こってしまったと言うのに――。何を変える力もなく、ただただ無意味に、彼の声は闇を渡って散逸した。
妻は首を横に振り、小さな声で、もう遅いのです、貴方――とそうつぶやいてから、愚鈍な夫の手をとった。
――此処で貴方は死んでいる。そうお思いなさいませ。
男の死体。
顔はもう判らない。妻が――潰してしまった。
(似ていたの)
細い首筋に、黒く光るナイフが近づいて。
(この人は貴方に)
(似ていたの)
――貴方、これが済んだら――何処へなりとも。誰も捜しはしませんわ。檻はもう消えますから。
――さようなら。
(私に――)
頭の中で何かが弾けたように。

愚鈍な彼も、そこに至ってようやく妻の真意を悟った。
――エラッ。
短く叫んだ声に掻き消され、それでも確かにぶつりと異様な音を起てて。
薄明かりの中、妻から噴き出すそれは黒い。
彼は声もなくただ立ちすくみ、妻は床に崩れ落ちた。
やがて妻は動かなくなり、誰とも知れぬ男の死体と同じように、ただの物へと成り果て、――生きていた証として彼女が持っていた、一切の罪を失った。
そして、妻から剥がれ落ちたそれらの罪は、当然のように彼に張り付き――そして彼は罪を背負った。
――彼は己の罪から逃げるようにして、夜明け前に故郷を離れた。馴染み深い故郷と一緒に、そこで生活していた“彼”自身を捨てて。
遥か西――海へ。

三話　罪の在り処

やっぱりあなたの考え違いだと思うんだけど――。
レネは砂糖を三つコーヒーの中に放り込みつつ、首を傾げてそう言った。
「考え違い？」
「そう」
そのまま聞き返したクレイグに、レネはコーヒーを啜りながら――物凄く甘そうである――頷いた。
「独りよがりと言うか、勝手と言うか――おじさん、怒っても良いくらいだと思うんだけど」
「そう――かな」
独りよがり。勝手。
レネは妻のことを言っているのだろうが、それらは全てクレイグにも言えることだと、彼自身は思っている。
困惑気味のクレイグの声に、そうだよ、と少年は少しだけ怒ったような声音で返した。
それからむすっとした顔で、あなたは考え過ぎだよクレイグ――と言いながら、半分程に減ったコーヒーの中に更に二つ、砂糖を落とし込んだ。

◆

――昨夜。
数日前拾ったと言う新聞に、死人として載っていたクレイグの顔写真と名前を見つけた少年は、当然、クレイグに仔細を質した。そしてクレイグは、その時は何故か、何もかもどうでも良いような気分に――よく言えば腹を括って、悪く言えば自暴自棄に――なっていたので、問われるままに全て話した。

彼の妻のことを。
レネは――黙ったまま、僅かに眉を潜めて聞いていた。
話しながら、予想外に冷静になってしまっている自分を発見して自己嫌悪に陥り、結果それをごまかそうとクレイグの舌は上滑りして、話さなくて良いことまで――妻が死ぬに及んで彼の分の死体まで用意したことのみならず、そこに至るまでの妻の言葉等も――話したように思う。
――否。
ただ単に、順序だてて話が出来ていたと言うだけなのか。それで落ち着いていたと感じていただけで、やはり彼は動揺していたのかも知れぬ。黙って溜め込んでいるのは辛いものがあったし、だから一度口を開いてしまえば、あとは滑り出すばかりで止まらなかったのだ。
全て話し終えると、レネは眉を潜めたまま、そう――とつぶやいて、それから、海に行ってどうするの、と尋ねた。判らなかったから、理由など知らないと答えた。すると死ぬ気じゃないだろうねと言うので、まさかそんな気はないさと返すと、レネはひどく奇妙な顔をした。しかしそれきり何も聞かず――それで会話は打ち切られたのである。
――ただ。
クレイグの床(とこ)を用意してくれてから、もう寝る、と言って部屋を出て行く時に、――レネはごく小さな声で言った。それは本当に本当に小さな声で、だからもしかすると独り言だったのかも知れないが――クレイグの耳ははっきりとその言葉を捉えた。
あなたが悪いわけじゃないんじゃないの――と。
少年はそう言った。

◆

ぽちゃんと音を起てて、レネはクレイグの前に置かれたコーヒー

に砂糖を二つ落とした。角砂糖は瞬く間に小さく崩れて、黒い液体の中に埋没した。それを満足そうにじっと見てから、更に入れようと容器に手を伸ばしたレネを、クレイグは慌てて止めた。
「ああ、良いよ。砂糖はもう良いから」
「砂糖は三つって決まりが……」
レネはよく判らないことを口走りながら角砂糖を摘み上げたが、クレイグはすかさずカップを手で覆った。これ以上甘くされては敵わない。
「……要らないの？」
「要らない。それに君は砂糖入れすぎだ」
三つどころか、先程五つ目を投入したのを目撃したばかりである。そう指摘すると、苦いんだもの、と少年は口を尖らせた。そのままレネはぷいとそっぽを向いて、カップを両手に包んだままゆらゆらと椅子を揺すった。
クレイグはコーヒーを掻き回してとりあえず一口飲んでみた。やはり物凄く甘かった。
レネは無言である。落ち着かない。そういえば、先程の言葉――考え違いと言うのはどういう意味だったのか――。
カップをテーブルに戻し、声をかけようとレネを見遣ると、少年はまだあらぬ方向を見ていた。
「――……？」
何気なくレネの視線を辿って、クレイグは怪訝に思った。ただぼうっとしているのとも思ったが、どうもそうではないようである。
――何か。
その眼は何かを捉えている。視線の先には壁しかないが、時折、何か――そう、生き物か何かを追うようにして。頭こそ動かしはしないが、薄青い瞳は明らかに何かを追い掛けていて、自然な動きですっと動く。
――何を見ている？
動くものなどこの部屋にはないのに。

なんだかひどく気になった。だが、聞くのはなんとなく躊躇われた。
「――おじさん」
不意に。
レネはぽつりと呼び掛けた。顔は相変わらずそっぽを向いている。
「なんだい」
「おじさんさ――」
壁からついと視線が外れた。少年はそのまま床に視線を落として、クレイグのほうを見ずに言葉を続けた。
「自分が悪いんだって思ってるんでしょう？」
誰も彼も。同じようなことを――言うものだと思った。
（貴方は――ご自分が悪いと）
耳の中に蘇るそれは、妻の声だ。
だが――誰が何と言おうとも、悪いのは――彼なのだ。
「――そうだ」
だからクレイグは頷いた。レネは何かに弾かれたように、ぱっと顔を上げた。飛んできた視線は鋭い。
「――どうして」
低い声で――。
少年はそう言った。
「どうしても何も――」
考えるまでもないことではないか。
妻は死んだのだ。幸福（しあわせ）になれなかったと叫んで死んでしまった、彼女は――。
「妻は――私が殺したも同じだからだ」
言うつもりのなかった言葉が口を衝いて出た。
その言葉は胸の中の空白にすっぽりと嵌り込んで、クレイグを奇妙に腑に落ちた気分にさせた。
レネはやはり怒ったような顔をして、些か乱暴な口調で、ほらやっぱりあなたは間違えている――と言った。睨みつけるような眼の

色で、少年はクレイグを見据える。
「あなたが殺したわけじゃない。自殺なんでしょう」
「それは――そうだ。だが」
「だがじゃないよ」
言いかけたクレイグの言葉をさえぎって、少年は声を張り上げた。派手に床を打ち鳴らして立ち上がり、膝に弾き飛ばされて、がたんと音を起てて椅子がひっくり返る。
「奥さんの言い分は可笑しいんだ。幸せじゃなかったとか、おじさんが真面目すぎてつまらなかったとか、そんなの全部、自分勝手な都合じゃない。おまけにそんな勝手な理由で人まで殺して、おじさんは今や社会的には死人じゃないか。迷惑だと思わないの？　そんなにあなたが嫌だったんなら、逃げ出すなり何なりすれば良いんだ、死ぬ必要なんて何処にも――」
「――判った、判ったから」
クレイグは軽く両手を挙げた。少年は、はっとしたように口をつぐみ、次いで自分が仁王立ちになっていたことに気づいたらしく、ひどく気まずそうな顔をした。
そそくさと椅子をもとに戻して、すとんと軽い音を起てて座り込んだ。拗ねたような顔をして頬杖を突く。それからクレイグをちらりと横目で見て、いかにもぶっきらぼうに言った。
「――ごめんなさい」
クレイグは苦笑した。
「いや。君の言うのも尤もだ」
「尤も、なだけ？」
「ああ」
レネはまだ、どこか不満げな顔をしていた。話をさせれば随分大人びたことも言うが、こうしていると丸っきり子供である。
だが、それにしても――どうして彼は、あんなにもむきになってクレイグの罪を否定したのだろう。傍から見ればレネの言い分のほうが正しいのだと言うことくらいは、クレイグとて承知している。

ましてやそれがこの聡明な少年に、汲めないとは到底思えないが――。
思考がまたしても顔に出たようで、レネはばつが悪そうな表情になって、
「おじさんがあんまり糞真面目なもんだから……」
少しは怒るとか憤慨するとかすれば良いのにと思って――とレネは言った。
糞真面目ね、とクレイグは脳内でその言葉を反芻する。そして苦笑した。
「エラにも言われたな、それは。私は――やっぱり糞真面目かい」
「うん。そう見えるよ」
レネも真面目な顔で頷く。いかんなあ、とクレイグは髪を掻き回した。少年は頬を吊らせて少し笑った。
「駄目ってことはないでしょ。真面目なのは美徳さ」
「糞がつくからなあ」
「でも、真面目は真面目だよ。いい加減な人よりずっとましに決まってる」
「――そうかな」
そうは――思えない。ならば妻は何故死んだのだ。
クレイグの思考は、結局のところ自分が妻を殺したのだという結論に落ち着いてしまっている。だからレネの主張は――それは真実、少年の気遣いから発しているものなのだろうが――邪魔なだけなのだ。それを丸呑みにしてのうのうと生きていけるほど、クレイグは図太くはない。妻に顔向けが出来ないと、そう思ってしまうのである。――だから。
赦してくれる人間など居なくて良い。
こんなところまで逃げてきた癖に。
きっと彼は、万人(ばんにん)に有罪だと認められない限り、――妻を弔うことすら出来はしないのに違いないのだ――。
「そういう――ものかな」

クレイグは先程の言葉を繰り返すように、小さくそうつぶやき、延々とさ迷う思考を断ち切った。
眼を上げるとレネの視線とぶつかった。レネは逃げるようにテーブルに視線を落として、そう思ったんだけどね――と言った。
「でもわかんない。どう言ったって、きっとあなたは納得しないんだろうね。僕はおじさんは悪くないと思うけど――でもどっちにしろ――僕が口を挟むことじゃ、なかったみたいだ」
ごめんなさい、と少年は再び詫びた。クレイグは首を振って、いいや、ありがとう――とだけ言っておいた。
部屋の隅の装飾過多な時計が、控えめにボン、と鳴った。

四話　流れ行くもの

毎朝八時を回った頃に、レネは出掛けて行く。小さな広告会社――というよりも殆ど個人宅だそうだ――で、タイプを打っていると言っていた。いまだに事情を聞けずにいるが、子供一人で随分とたくましいものだと思う。

一晩だけ泊めてもらうはずだったのに、四日経ってもクレイグは少年の家に居座っていた。

二日目の朝――朝食とコーヒーを振る舞われて、少し話し込んだ後。レネは出掛ける前に駅までの地図を描いてくれたので、一緒に出ようと思ったのだが――外に出たら吹雪いていたのである。強行突破するから大丈夫だと言ったら、必死の形相で止められた。それも、クレイグは雪道で埋まる人の典型だからと言うよく判らない理由で、である。

そんな馬鹿な、と思ったのは確かだが、雪道に慣れていないのもまた事実である。埋まるかどうかはさておき、遭難くらいはするかもしれないと思ったので大人しく従った。

さすがに迷惑だろうと、三日目の朝には断固発とうと思っていたのだが、朝になってみれば道の状態は前日よりもひどかった。雪は引っ切りなしに降っているのだから、積もるばかりなのは当たり前であるが、レネの「埋まる」という言葉もここに至っては妙な現実感を伴う。

おかげで「しばらく居れば良いじゃない」という少年の言葉に、クレイグはうっかり頷いてしまったのである。

――ごまかしたり、嘘をついたりする必要がなくなったからだろうか。

クレイグの中に在った海へ行きたいという願望は、急速に萎み、消え始めていた。元々――あれは逃避から逃避するための願望に過ぎなかったのだ。その場凌ぎのものでしかなかったのだと、彼は思

う。
だから、レネの言葉に頷いた時に少年が見せた、この上なく嬉しげな表情だけで、彼はすぐに、ああこれでも良いのか――と、そう思ってしまったのだ。納得――してしまった。
とはいえ、これからのことを考えると、あまり長逗留は出来ない。少ない金を遣り繰りして此処まで来たのだし――。クレイグがそう言うと、じゃあ安宿だとでも思っててよ、と少年は笑って言った。ご飯の分だけ出してくれれば良いよ、僕が勝手に引き留めてるんだから――。
懐具合が寂しいのは本当だったから、レネの申し出は正直ありがたかった。逗留中の食費だけなら、海までの旅費くらいなら残る――とは言うものの、なんとも心苦しいのも確かである。
だから掃除でもしようかと言ったら、じゃあ二階だけ、と言う。クレイグとしては、荒れ放題の一階を綺麗に整えたいのだが――彼はこれでなかなか掃除が好きなのだ――それもお節介と言うものだろうと思ったので言わずにおいた。
それでも、元から綺麗な二階の掃除などすぐに済んでしまい、暇になるとやはりどうにも階下が気になった。
風の吹き込む玄関に立って、周囲をぐるりと見回してみた。
割れた窓。舞い込む雪。厚く埃を被った黒い床と、重厚な玄関棚――。
見る影もなく荒れ果てた玄関の光景は、眼の中に残っている二階の風景を、まるで幻のように薄く揺らがせた。奇妙な夢の中に居るようで、クレイグはなんとなく不安になって階段の位置を確認した。
――あの時聞けば良かったか。
どうしてレネは――たった一人でこんな家に住んでいるのか。ただ単に親と死に別れたというだけならば、この有様はどうしたことか――。
割れた窓から外を覗いてみた。木の窓枠に、何かで殴り付けたような凹(へこ)みが在るのが見て取れる。何か――石か、それとももっと重

いものが――ぶつかった跡のように見えた誰かが故意に割ったのか。道に面した生垣から、この窓に向かって石を――？

そこまで考えて、思考がさらにその奥に向かおうとしたので、クレイグは焦った。

――馬鹿な。何を詮索しているのだ、私は――。

気がつけばあれやこれやと探ってしまっている自分に嫌気がさして、彼は窓から無理にも視線を引き離した。レネのことはレネのこと、要らぬ詮索をする権利は彼にはない。

居間へ引き上げて、本でも読もうかと思い立って本棚の前に立った。

ずいぶんたくさんある。レネのものだろうか。それとも以前のこの部屋の主――少年の父親のものだろうか。

詩集、小説、哲学書。そういった類の本が、几帳面に大きさごとに分類され、本棚にきっちりと収まっていた。大きさで分けたものをさらに内容別に分けて、されを今度は著者名の順に並べ――その、いかにも几帳面な印象を受ける書棚を見渡して、やはりこの本はレネの持ちものなのかもしれないとクレイグは思った。少年がどうにも几帳面で、加えて妙にこだわる質であるらしいことは、行動を見ていればよくわかる。そもそも、偶然拾った新聞に載っていたクレイグの顔を覚えていた時点で――その記憶力にも驚愕するが――一体どんな新聞の読み方をしているのだと問い質したくなる。それこそ几帳面に、隅から隅まで読んでいるのだろうか。

クレイグは一人苦笑して、本棚から適当な一冊を見つくろって引き抜いた。

◆

“時間は流れ移ろう川の流れだ。その流れは人の意識をさらい、人を川辺に置き去りにする。川は記憶を押し流し、やがては海へ注ぎこむ。この世界の凡てのものは、いつかその海の波間に消えていく

運命にある”

◆

黒い牛がいる。鼻の先から尾まで真っ黒なのに、耳だけが白い。
――彼女が今夜、子牛を産むから。
彼は隣に居る誰かに話し掛けている。
――今夜はこっちに居るよ。君は戻って先に休んでいてくれ。
相手はつまらなそうに、こんな田舎で牛の世話なんて馬鹿みたいだわ、貴方もちっともかまってくれないし――と言う。
――たまには何処かに連れて行ってくれないと、他に良い人探して来ちゃうから。本当はわたし、田舎だって嫌いなのよ――。
彼はそれに何か答えようと口を開き――。
「――おじさん、起きて」
声がした。ゆさゆさと揺すられている。
「起きてったら」
これは誰の――声だったか――。
「おーじーさんッ」
「――ん」
クレイグは顔を上げた。肩を掴んでいる人物と眼が合う。牛はいない。
「あれ――メイニイ・スゥは――」
「まだ寝てるの？」
レネだった。まだコートを着たまま、困ったようにクレイグを覗き込んでいる。
どうやら居眠りしていたらしい。額が痛かったので指でさすると、細く跡が付いているのが判った。前のめりになるあまり、机の縁に額が押し付けられたようだ。
時計を見ると、まだ二時である。随分早いねと言うと、今日は仕事なかったんだ、と言う返事が返ってきた。

本読みながら寝るなんて器用だね、とレネはからかうような口調で言う。それでクレイグは、書棚から勝手に拝借した本のことを思い出した。
「ああ――暇だったから勝手に借りてしまったが」
「良いよ、好きに読んで」
レネはようやくコートを脱いだ。
「これは――君の本かい？」
「小説は僕のだけど、難しいのは父さんの。哲学の本とか」
「なるほどね。ああでも――本を並べたのは君だろう」
「あ、判る？」
「並び方が几帳面だから。秩序立ててあると言うか――君、ルール作るの好きだろ。砂糖は三つとか、朝出て行く時は必ずこの部屋を八時六分に出るとか」
レネは肩をすくめた。
「砂糖は三つ――は確かに言ったけど。時計まで見てると思わなかったよ」
「いやあ、暇なもんだから」
クレイグも真似して肩をすくめて見せる。レネはコートを吊すと、クレイグの向かい側の椅子に腰を下ろした。
「朝はね――八時ぴったりに出るとちょっと早いんだ。十分だとちょうど良いくらい。――でね、六分にこの部屋出るじゃない。勝手口から出るとぐるっと回らないと行けないからさ、それでぴったり八時十分なんだよ」
「そうか。――いや、時間のことはべつに良いんだが――砂糖は少し減らしたほうが」
レネは盛大に顔をしかめた。
「絶対やだ」
子供じみた口調でそう言った。それから話を逸らそうとするように、ねえミニイスーって何――と、唐突に尋ねた。
「ミニイスー？」

「さっき言ってたよ。寝ぼけてボソッと」
そう言われて、クレイグは先程見た夢を思い出した。
「あ――ああ、メイニイ・スゥ？」
「そうそれ。メイニースーって誰？」
「牛。雌牛だ」
父の仕事を継いで、クレイグの代になってから子牛を産んだ、記念すべき一頭目の牛である。黒くて綺麗だったから、クレイグも気に入っていた。
レネはふぅん、と言って、少し笑った。
「名前つけるんだね」
「つけたのは親父だがね」
メイニイ・スゥにリリアン・マーシャ、アメリエにコルデリア。雌牛にはやたらと凝った名前をつける癖に、雄牛の名前は適当だったのは、父の趣味に違いない。
「随分可愛い名前だねぇ、牛なのに」
同じことを思ったらしい。牛は結構可愛いもんだよ、とクレイグは言った。
「牛って見たことない。その――メイニースーは白黒ぶち？」
「いや、全身真っ黒だった。耳だけ白い」
「へぇ。――あ、ねぇ、じゃあ雄牛は？　名前ないの」
レネは無邪気な口調でそう尋ねた。
――ひやりとした。何故かは判らない。何かそう感じる要素が在ったのだろうが、それは認識すり前に霧消した。
理由を見つけられないままそれをやり過ごし、クレイグは何食わぬ顔で言葉を紡いだ。
「始めは私がつけてたよ。だが私はセンスがないらしくてね――後から来たのには妻が」
名前を――そう言おうとした瞬間だった。
硝子の割れる音がした。次いで何か重いものが転がるような音。
クレイグは言葉を切って、少年を見遣る。レネは素早くクレイグを

見返し、すっと腰を浮かせた。
「下だ」
するりとテーブルを離れ、ドアに向かいしなにクレイグの腕を掴んで引っ張った。
「――来て」
まだ居るかもしれないから――どういう意味なのか、クレイグには判らなかった。しかし、そう言ったレネの顔には、ひどく形容し難い表情が浮かんでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6597x/

波間に沈む者達

2011年10月28日13時19分発行